


早稲田大学大学院日本語教育研究科


2018年7月


博士学位申請論文審査報告書

論文題目：日本語の作文教育における文章構造の研究
—韓国人学習者による「まとまりの欠如」の課題—

申請者氏名：青木 優子

主査 宮崎 里司 署名 宮崎里司 
(大学院日本語教育研究科教授/日本語教育学)

副査 小宮 千鶴子 署名 小宮千鶴子 
(大学院日本語教育研究科教授/日本語教育学)

副査 李 在鎬 署名 李在鎬 
(大学院日本語教育研究科教授/日本語教育学)

<本論文の概要>

本研究は、日本語の論理的な文章において、書き手の主張が読み手に明確に伝わるようなまとまりのある文章を書くための日本語の作文教育の方法を、大小の話題のまとまりを表す「文段」の統括関係に基づき提案することを目的としている。本研究で扱う「論理的な文章」とは、書き手が読み手に何らかの主張を表現する「意見文」と、「説明文」の一種である、講義の受講後に書かれた「要約文」である。韓国人日本語学習者は、文章構造に関する教育や、論理的な文章の文章構造が異なるため、文章の要約力が弱いと言われている。そこで、韓国人日本語学習者が、日本語でまとまりのある論理的な文章を書くためには、日本語の文章構造を学ぶ必要があると考え、本研究の課題を、以下のように3点設定し、読み手が、韓国人日本語学習者の作文における問題点とされる「まとまりの悪さ」を、文章論の「統括論」の観点から明らかにした。

- 課題1 韓国人日本語学習者の書く日本語の論理的な文章における「まとまりの欠如」とは何か。
- 課題2 韓国人日本語学習者の書く日本語の論理的な文章で「まとまりの欠如」が生じる要因にはどのようなものがあるか。
- 課題3 韓国人日本語学習者の文章表現力を育成するための教育方法はどのようなものか。

分析方法として、佐久間（1999）の文章構造の類型「文章型」の全6種を用いて、文章の全体的構造や、文章中で最も統括力の大きい「主題文」が、文章中のどの位置にあるかを分析する。次に、各「文段」がどのような機能を持ち、文段相互がどのような統括関係か、さらに、「文段」を統括する各種の「中心文」が、それを支持する「副次文」をどのようにまとめるのかを分析した。以上の分析により、韓国人日本語学習者の抱える「まとまりの欠如」の要因を解明し、文章の統括関係という観点から「文章型」、「文段型」、「連文型」に基づく作文教育の方法を提案している。

本論文は、「Ⅰ. 序論」（第1章）、「Ⅱ. 本論」（第2章～第9章）、「Ⅲ. 結論」（第10章）の全10章より構成される。

第1章は、本研究の目的と課題と位置づけ、日本語学習者が論理的な文章を書くためには、統括力のある文章構造の教育が必要だと考え、上記の研究課題を3点設定し

た。

第2章は、日本語の作文教育に関する先行研究について記述した。本研究では、「まとまりの欠如」が生じる要因を統括機能の観点から分析し、読み手に主張が明確に伝わる文章が書けるよう、教育方法の提案を試みている。

第3章は、本研究の方法論を扱っている。韓国人日本語学習者と日本人大学生による2種の意見文1・2と、2種の人文学系の講義A・Gを受講した韓国人留学生と日本人大学生による受講後の要約文という全4種を分析対象とした。2種の意見文の分析方法は、佐久間(1999)の6種の「文章型」(文章構造類型)を、1. 接続表現・2. 指示表現・3. 提題表現・4. 叙述表現等の形態的指標と内容のまとまりから分類し、書き手の区分した改行段落を検討し、筆者が各作文の「文段」を認定した。講義の受講者の要約文は、講義Aの要約文の分析方法に基づき、講義Gの要約文を分析した。講義Gの談話を構成する「情報伝達単位 (communicative unit, CU)」全16類35種が受講者の要約文GYにどのような形式で残存するかを、「原話残存率」として求め、受講者の講義の理解類型を分析した。

第4章・第5章は、「「賛否論述」の意見文1」と「「自由記述」の意見文2」の文章構造について検証した。日本人大学生と韓国人上級日本語学習者による「賛否論述」の意見文1(「制服の是非」)の①「文章型」、②「文段の機能」と文段の統括関係、③「中心文」の機能と副次文との統括関係を分析した。その結果、賛否論述と自由記述の意見文1と2では、最も多い「文章型」が異なっていた。

第6章・第7章は、それぞれ、「人文学系講義A」と「Gの受講者による要約文の文章構造」である。まず、「尾括型」の人文学系の講義Aを受講した日本人大学生(J)と韓国人留学生(K)の受講要約文を主に先行研究として取り上げた。次に、「両括型」の人文学系の講義Gを受講した日本人大学生(J)と韓国人留学生(K)の受講要約文について、①「文章型」、②「文段の機能」と文段の統括関係、③文段内部の構造を分析した。「尾括型」の談話型の講義Aと、「両括型」の談話型の講義Gの受講者の要約文の「文章型」は、いずれも「頭括型」が最も多かったことが明らかになった。

第8章は、「韓国人日本語学習者の日本語の意見文と要約文における「まとまりの欠如」と題した論考である。

続く、第9章は、「文段の統括力に関する作文教育の提案」について論述した。「まとまりの欠如」の要因が、異なる大きさの話題の統括力の問題であったため、韓国人

日本語学習者は、(1) 文章の全体的構造の「文章型」、(2) 「文段の機能」と統括関係の「文段型」、(3) 文段内部の中心文と副次文の統括関係の「連文型」という3段階の話題のまとめ方を学ぶ必要がある。まず、モデル文章の読解活動を通して文章構造と文段の統括関係を学び、次に、原文の表現や構造を反映しながら要約文を書く活動を行ない、最後に意見文を検討し、書く活動を行なうことを計画した。

最後の第10章は、「本研究の結論と今後の課題」と題し、本研究における課題1、課題2、課題3に対する結論と今後の課題を記述した。本研究の結論は以下の3点である。

結論1 韓国人日本語学習者の書く日本語の論理的な文章における「まとまりの欠如」とは、「1. 中心段の統括力が弱いこと」、「2. 中心文の統括力が弱いこと」の2点であることが明らかになった。

結論2 韓国人日本語学習者の書く日本語の論理的な文章に「まとまりの欠如」が生じる要因は、全10点が明らかになった。「1. 中心段の統括力が弱いこと」の要因は、①中心段（主題文）が書かれていない、②中心段（主題文）と無関係な文段が挿入されている、③文段の接続関係に問題がある、④段落の作り方に問題がある、の4点、「2. 中心文の統括力が弱いこと」の要因は、⑤中心文が書かれていない、⑥一文一文段で、中心文を支える説明が不足している、⑦別の文段の説明が間違った文段に書かれている、⑧文段内部の話題が唐突に変わる、⑨中心文と前後の副次文との統括関係に問題がある、⑩一文中に複数の文段が含まれている、という6点であった。

結論3 文章と文段の「まとまりの欠如」が、「中心段の統括力」と「中心文の統括力」という2種の異なる大きさの統括の問題であることが明らかになったため、結論2の10点の課題を解決するために、「文章型」、「文段型」、「連文型」という3段階の統括機能を教育する必要があると考えた。そこで、韓国人日本語学習者の文章表現力を育成するための教育方法を8項目提案し、意見文の作成を通して自由に使えるようになることを目標に教育方法を提案した。

<本論文の評価>

本研究の意義として、以下の点があげられる。

本論論文は、韓国人日本語学習者の論理的文章に見られる「まとまりの欠如」という課題について、韓国人日本語学習者と日本語母語話者の意見文と講義要約文とを資

料として、文章・談話論の「段」の統括機能の分析から、「中心段（主題文）の統括力」および「中心文の統括力」の弱さに「まとまりの欠如」の原因があることを明らかにした点は、高く評価できる。

また、「まとまりの欠如」が見られた資料の分析から 10 の要因を抽出し、それらに基づいてまとまりある論理的文章が書けるようになるための 34 の教材案と評価のためのルーブリック案とをそれぞれ示したことは、有効性の検証はなされていないものの、研究成果を日本語教育の実践へとつなぐものとして、高く評価できる。

さらに、これまでの日本語学の研究でマクロ的な視点による文章研究では、学習者の文章に見られる「まとまりの欠如」に関わる現象が十分に記述できないことを指摘した上で、文段を中心とするミクロな視点からの分析を提案している点で、理論的な貢献も認められる。

一方で、本研究における課題もあげられる。

実際の文章作成は、内容的側面と形式的側面が相互に作用しながら進む複雑な過程なので、形式的側面の学習に重点をおく本論文の教材案やルーブリック案のみでは、論理的文章のまとまりの欠如の課題が十分には改善されない可能性がある。また、本論文は言語的分析が主で、第 9 章において展開されている教育現場への提案が実際に使用され、学習者の文章の改善にどう貢献するかについてのデータが示されていない。そのため、その提案の有効性について疑問が残り、応用可能性についての検証を継続する必要がある。異なる母語による社会文化環境で、言語表現活動を育んできた学習者による独自の表現形式を、単なる逸脱ではなく、個別性として捉え、それが日本語表現の豊かさにつながるのではといった捉え方に対し、規範と多様性の観点からの言及が弱い。

<本論文の判定>

上記の問題点はあるものの、本論文の研究成果は韓国人学習者の作文教育に留まらず、他の母語話者の作文にも応用可能な潜在的な価値を有し、日本語教育学の博士学位に値する論文といえる。